

2016（第14回）山形県山岳連盟 指導員研修会 実施報告書

義務研修コード：0005273

1. 実施日 平成28年9月3日（土）～4日（日）
2. 会場 尾花沢市 船形連峰 御所山荘
3. 主催 山形県山岳連盟 登山部 指導員会
4. 共催 日本山岳協会 山岳共済会
5. 参加者 11名（内指導員9名） 山岳共済保険加入者6名
指導員：伊藤吉樹・高橋実・菅野享一・吉田岳・田中正浩・守屋裕孝・國分清貢・
横山利夫・渡部政信
一般会員：白幡史生・高谷勘
6. 研修内容
 - 1日目 13:00 受付
13:15 開会式 進行 吉田副委員長
山形県山岳連盟 伊藤会長あいさつ
尾花沢山の会 国分指導員あいさつ
菅野指導委員長あいさつ
13:30 山岳共済保険・遭難事例についての説明 菅野委員長
13:50 事故発生時の初期対応・ファーストエイド等の研修 渡部指導員
14:00 ロープワーク・エイト環を使用した下降方法の検証 吉田副委員長
18:00 情報交換会
 - 2日目 案内：吉田副委員長
6:30 道元峡・層雲峡に於ける沢歩き実技研修
御所山荘～道元峡～落合～層雲峡～大沢小屋（元営林署造林小屋）
～御宝前大滝（戻り）
15:00 終了式（参加者感想）
15:30 解散

7. 研修概要

これまで5月に予定していた春山合同技術訓練を兼ねた指導員研修会であったが、会場予定地であった小国町の飯豊連峰登山口にある天狗平ロッジまでの道路工事により、9月に尾花沢市の船形連峰登山口となっている御所山荘に変え開催したものである。主に二日目の丹生川流域の道元峡と層雲峡の沢歩きであるが、一日目は事故発生時に於ける応急手当ての留意点、最新のエイト環での下降方法について検証した。



伊藤県岳連会長あいさつ

3日(土)7:40 渡部車に同乗し小国を出発したが途中、先行した吉田君から林道が荒れているとの連絡があり、車高のある横山氏の車に乗り換え後を追う。途中買い出ししながら11:50 御所山荘へ到着したが、去る8月30日に東北を横断した台風10号の影響で新鶴子ダムからの林道はところどころ砂利道が洗掘され維持補修作業は行っているものの車高の低い乗用車では低部を摺る箇所もあり、ダム付近には案内標識も見当たらず道に迷った参加者もいたが、なんとか11名の参加者が山荘までたどり着いて安堵した。

平成14年に改築された御所山荘は途中の道路状況からは想像できない、ログハウス調のつくりで、二階には管理人室、12畳程の和室とフローリングのフロアにはテーブル12人掛けがおかれ、発電機、炊事場、10円ガス台、水洗トイレ、ナベ、食器類も完備された山の中のコテージといった素晴らしい建物であった。

13:00からの開会式では、今年度から山形県山岳連盟会長に就任された伊藤吉樹氏よりあいさつを頂き、地元尾花沢山の会所属の國分指導員より船形連峰の山域照会と歓迎のあいさつをいただいた。

菅野からは山岳共済保険の説明と小国町に於ける遭難事例について報告させていただいた。13:50から屋内で事故発生時の初期対応として、応急措置の考え方や留意点について渡部政信指導員(小国町飯豊朝日山岳遭難救助隊長)から説明があった後、2人一組となり互いに遭難者と救助者に入れ替わり遭難者と遭遇した場合の接近、声掛け、観察、触診、負傷部位の確認等を実践した。「医師でない人が応急処置を行ってもいいのか」という素朴な疑問が生まれるが、緊急性の高い場合のやむを得ない処置として、リスクはあるものの現状で出来ることを可能な範囲で「それ以上症状を悪化させない処置」を講ずることが基本的な考えであり、最新の考え方、知識や技術の習得は必須科目と認識したところである。



ロビーでの研修状況



渡部指導員による初期対応説明



吉田副委員長によるロープワーク

その後 16:00 から野外に於いてエイト環を使った下降方法について実技研修した。吉田副委員長より最近の下降方法の要領について説明があり、下降中カラビナを使用した固定方法や操作の効率性を考慮したエイト環下でのプルージックの取り方等について従来の方法との比較検証を行った。より安全性や確実性、操作性を考慮し考え方や技術も日進月歩変わってきており、指導する立場にあってはこうした機会を捉え自己を高めることが大切と感じた。



参加者一同



懇親会

17:00 予定通りに研修内容を終え 18:00 からの情報交換会に備え準備作業にはいる。御所山荘は避難小屋（無料）と一緒にっており、本日は我々の他に利用者がいないことから、高橋管理人の計らいで情報交換会はガスコンロが使える避難小屋で行うことにした。一階は 10 畳程のフローリングと二階もあり、室内には流し台もある立派な部屋である。

情報交換会は高体連所属の守屋指導員の乾杯で幕を開け、参加者から自己紹介いただき、今回県山岳連盟加盟団体から 2 名参加いただいたが、釣りが好きで沢に入る為、安全な沢

歩き技術という観点から参加したという高谷氏（東根山岳会）と、これまでも各種研修会に参加させていただいているが、安全登山の為の知識や技術の習得はもとより、以前から道元峡、層雲峡に興味があったので参加したという白幡氏（長井山岳会）からあいさつがあった。今回は山小屋での開催ということで、地元名産の「ペそら漬け」等の差し入れや個々で持ち寄った肴をつまみに、活動状況や体験談等の山談義に話題は尽きなかったが、22:00 一日目を終了した。

二日目、日程では 5:00 起床であったが、昨夜摂生したせいでもないが 4:00 に目が覚める、山間のためかまだ暗い、まもなくして朝食担当の横山氏が起床し炊事場で調理を始めた。それぞれに朝食を済ませ 6:00 山荘前に集合、沢の渡渉を考え各々足拵えをしている。吉田副委員長から日程説明後 6:15 御所山荘を出発する。歩くこと 5 分道元峡への下り口となる駐車場に着く、案内看板でコース



(二日目) 出発前ミーティング

を確認し沢まで下る。林道を下ると沢に降りる階段があった。材木岩や竜ヶ滝等の名勝散策に訪れる人も多いのだろう、次第に沢の音が大きくなるにつれ期待が高まる。

6:30 いよいよ濡れ覚悟の入渓である、昨日國分氏が台風の影響で水嵩が多いと言っていたが泳がなくて良いことを願い入水、膝までの水位である、深みでは水圧に押され足が流される、摺り足で川床の大きな石を足場に進む。朝の気温は低いですが水の冷たさは爽快さを感じる。「川遊び」は何年ぶりだろうか「カジカ突き」の思い出が懐かしい。この日の為に新調した地下足袋の威力を試す時である。それほど頻度で沢歩きはしないので高価な沢靴を買うのはあきらめ、W店で悩んだ末、スパイク付きでないゴム底製を購入した、また、正式名称は分からないがスネの防護に脚絆のようなスパッツもあるようだが、山で使用するのものとは全く違うもので、これも高価なのであきらめ、砂の流入防止からくるぶしの隠れるタイプを選んだ。つま先は堅い材質のコアが入っているので岩や石に当たっても痛くはないが、靴底が薄いせいで石原を歩くには刺激が強く健康に良いのか悪いのか分からない。ヌルめきのある石でない限りフィット感は抜群で滑ることは無かった。なるべく浅瀬を選びながら右に左に歩きやすいコースを上流へ向かう。蛇行した沢の水衝部では洗掘され深みであることが多く、波立っているところは浅瀬や急流が多い、吉田副委員長は早めにコースを決めながら無理をしないことがポイントだと言う。左右から流れ込む小沢も多いので飲み水の心配はないが、右岸側（下流に向かって右側）からの沢水はペーハー値が低く飲料に適さないとのことであった。

7:00 幅 30cm に満たない足場と鎖を頼りに岸壁をへつって行くと材木岩に到着、しばしの休憩をとり自然の作りだした芸術作品に感嘆、30m程の高さで規則正しい角柱状の岩がびっしり並び屏風のように立ち並ぶ光景は



林道駐車場から道元峡へ向かう



道元峡への下り口（丹生川）



渡渉開始



要所にクサリが設置されていた

なんとも不可思議である。東北大震災で一部崩壊したとのことだったが記念写真を撮り上流を目指す。（要所に鎖が張られているが途中でボルトが抜けているところもあり、引っ張るとその分ダルミが生じ岩場から落ちる危険性もあるので注意が必要だ。）

8:30 落合通過、グラビ沢との合流点である、ここから層雲峡に入る、しばらく進むと川岸の岩が丁度遊歩道に整備されたかのように平らに張り出している、これもまた自然の匠が作り出した光景である。途中単独の釣り人がいた、足元に気を取られ魚影は確認できなかったが、エメラルドブルーの長瀬に大物が潜んでいるようで成果はどうなのか気になるころであった。

9:50 大沢小屋へ到着、ここは昭和26年に旧営林署が建てた造林小屋である。だいぶ朽ちてきているが、樹木に囲まれた2階建ての建屋はバルコニーもあり一見ペンション風な温かさが感じられ、活気に満ちた当時の面影が偲ばれた。10:40 目的地である御宝前大滝に到着、50m近い滝のしぶきが周囲に飛び散り寒いくらいである。修験者の禊の場でもあったのだろうか、対岸のガレ場で石を落とさぬよう注意し休憩をとる、地図を見ると船形山（御所山）△1500.1mへの登山ルートである、名称は船を伏せた形に似ているとか、船形権現からきているとかの説があるが、宮城県側では「船形山」、山形県側では「御所山」と呼ばれているらしい、国土地理院地図でも船形山（御所山）の標記がされている。

今回は災害備蓄用レトルト食のきな粉餅とドライカレーを持ってきた、きな粉餅はひと口サイズが12切れ入っており水に浸し1分で水切りして、きな粉と砂糖をかければ出来上がりである。言わば乾燥豆腐的な感はあるが餅に似た触感でなかなかいける。割り箸やつま楊枝も入っている優れたものである。ドライカレーはお湯で15分、水（15℃）を入れて60分と書いてある、温かい方が美味いだろうと



足場に注意し慎重にへつる



難所の高巻きである



材木岩に到着



しばし自然の匠を觀賞

お湯を沸かし説明書を見ながら作ってみる、封を切ると中にはスプーンとカレーパウダーが入っていた、パウダーを混ぜお湯を注ぐ「ウマイ」これもなかなかいける。あけ口が密封出来るので余ったら持ち歩けるというのが良い、山では休憩中にこまめに水分や軽食をとることがバテないコツである。容器も長期保存に対応してしっかりしており、お湯に入ればまた温かいものが食べられることや、寒い時にはカイロ代わりになる（使い方はアイデア次第）出来たてが一番、山では食が楽しみの一つと考え

普段は持ち歩くことがないレトルト食品であるが、今回は災害用非常用食品として配慮された、「手軽さ・味」を試させていただいたが、ここまで進化してきたことに脱帽であった。何といっても作り易さ、価格も種類によって270円～360円程度で長期保存も可能なことから、非常食としてザックに一袋入れておくのも一考かもしれない。状況を写真でも載せたかったのだが、残念ながら大滝手前のヘツリでカメラ共々入水してしまい動作不能になってしまった。（ザックの中にビニル袋をインナー代わりとして使用しその中に他のものは入れていたので濡れの心配はないが・・・それ程のダメージはなさそうなので再復活を祈る。）

11：20 御宝前大滝から下山開始、辿ってきたルート沿いに下る。登りは地図には載っていない小沢の合流があるため似たような状況だとルート確認に躊躇するが、下りは流れに沿って下るので比較的気持が楽である。途中落合から林道に登り御所山荘へ向かったが、途中隧道が2か所あり1か所は崩落していたが素掘り

の壁面は今にも崩れ落ちそうな岩肌で暗く要注意箇所であった。台風の影響かところどころ道路崩壊が進み車両通行は出来ない状態、沢の中から見えた崩落地や法面の防護ネットは今歩いている林道だと分かった。今朝道元峽への下り口であった駐車場には猿の群れが逃げもせず遊んでいた。道案内をするように先に歩いていた猿が気づいて横に逃げるとあちこちで猿が駆け回った。林道に木も無いのにコクワの実が落ちていた猿の仕業なのか先行した仲間なのか分からないが、子供の頃米櫃に入れておいて熟したのを食べたことを思い出した。14：40 御所山荘へ到着、帰り支度をした後15：00から閉会式を行った後に解散となった。



屏風のような材木岩



記念撮影



自然が作り出した遊歩道



大沢小屋（元営林署造林小屋）



しばし休憩

今回の研修では、ファーストエイドとして初期の応急処置の考え方と最新のロープワーク技術、沢歩きがメインであったが、以下の点について自己研鑽する機会となった。

これまでの研修では負傷者の応急対応については、各症状や状態に対する対処方法であったのに対し、昨年の5月の研修に引き続き要救護者への接近の仕方から声かけの方法、症状や負傷部位の確認方法等を再度確認する機会となった。医師でもなければ十分な医療設備があるわけでもないところで、「それ以上悪化させないよう」な対応が出来るまでにはまだまだであるが、知ると知らないでは雲泥の違いであり繰り返しの中で研鑽を高める機会となった。

ロープワークについては、時間の関係もありポイントを絞って行われたが、操作性を考慮し、これまで下降時のプルーシックによる自己確保をエイト環の上から下に変えた方法と、カラビナを使用した下降途中の停止方法について検証した。まずは平場で要領を習得した後に壁面での実技により何度かやってみないと身につかない、基本はより安全性や操作性を高める工夫にある、限られたギアを使ってのロープワークも楽しみが広がるものである。



泳いで渡る強者現る



「白幡さん大丈夫かー」「大丈夫だー」

沢歩きについての留意点は、やはり履物と水濡れ対策であろう。その時々でオールラウンドに適した靴は無いと思うが、靴底は薄いよりは厚い方が良かったし、フェルトやゴム、スパイク製かは岩場や玉石、岩質、苔や水質等によっても違って来るようだし、長時間水中に浸かっていると保温性もあった方が良い、服装も乾きの早いものや、足回りもスパッツ等が無い場合はズボンの裾も紐などで縛っておいた方が良いようだ。

入渓にあっての注意事項は、ルート判断、浮石による転倒、捻挫、転石の隙間での負傷、転落、滑落、落石、入水による体温消耗などが考えられるが、雨天時の増水による危険性や谷では携帯も入らない為無線機の準備も必要かと感じたところである。

雑感を交えての報告になってしまったが、初めての沢歩き体験は童心に帰り新鮮であった。道迷いやちょっとした不注意からの事故を招かぬよう無理はせず、事前の下調べや事後の自己検証もまた楽しみを増加してくれることだろう、またの機会に季節を楽しんでみたい沢であった。

山形県山岳連盟 指導委員長 菅野享一



御宝前大滝にて